〈研究ノート〉

生成期における「たて花」

——十五世紀中期の「花」と連歌の一様相

小林善帆

はじめに

十五世紀中期、「花」は、中心に枝木「しん（真・心）」を立て草花「下草」を添えるという形を整え始め、連歌会の場の装飾などとなることにより十五世紀末、「花」の最初の様式である「たて花」[1]として確立する。[2]

他方、連歌は中興期に入り、のちに連歌七賢と称せられた連歌師たちの活躍を見る。この時期以降、連歌師たちにより「瓶に挿す花」が素材として詠まれるようになり、また同時期、歌人で東福寺書記・正徹[3]の和歌に、連歌師で六角堂法師・専順[4]の連歌と相似する「挿す花」を詠み込んだ和歌が見出される。

この時期の「花」について考えていくと、最初に、一、中世の和歌においてほとんど使用されることのない「瓶に挿す花」という素材が正徹の和歌素材に見られるのは何故か、次に、二、連歌素材としての「瓶に挿す花」の使用と連歌師・専順、「花」・「池坊」との関係はどのようで、当時の「池坊」や六角堂はどのような存在であったか、また、三、連歌・和歌において「挿す花」と詠まれるものが何故「花」の様式としては「たて花」と言われたのか、さらに、四、連歌会と「花」とのかかわりはどのようであったかなど、連歌との関係において明らかにすべきことが多くあることに気付く。物事においてその発生期を明らかにすることは不可欠のことであるにもかかわらず、「たて花」生成期については詳細な研究がなされておらず、「たて花」の生成に関し推論の域を出ていないことは否めないであろう。

また、これらのことは一つの研究方法に依るのではなく、連歌・和歌素材という点においては国文学の方法、「花」の歴史という点

においては歴史学の方法をとりつつ、その相互関係のなかで考える必要があると思われる。

このようなことから右に挙げた四つの点を中心に、十五世紀中期の「花」と連歌について明らかにすることにより、「たて花」の生成期を考えたい。本稿でいう「花」とは、瓶をはじめとする水をいれる容器（花入れ）に、植物（花）を入れる行為全般を指すものとする。

1　正徹と「瓶に挿す花」

①　和歌素材としての「瓶に挿す花」

ひさしかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれどうつろひにけり
つらゆき

返し　千世ふべき瓶に挿せれど桜花とまらむ事は常にやはあらぬ
中務

『後撰和歌集』[5]巻三・春下・八二・八三

おもしろくさきたる桜をながく折りて、おほきなる瓶にさしたるこそをかしけれ。
（第四段）

勾欄のもとにあをき瓶のおほきなるをすゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、（以下省略）。
（第二十三段）

『枕草子』[6]（以上、傍線は筆者の加筆）

天暦五年（九五一）成立の『後撰和歌集』、長保二年（一〇〇〇）頃成立の『枕草子』、ともに「瓶に挿す花」を記している箇所は、当時の生活において「瓶に花を挿す」ことがあったことを示していよう。それゆえに「瓶に挿す花」を素材とした和歌が詠まれたのではないかと考えがちであるが、「国歌大観　CD-ROM」や「国際日本文化研究センター　和歌・連歌データベース」[7]、「連歌、和歌、俳諧検索システム　Keiko II」[8]の検索結果からは、和歌において「瓶に挿す花」を詠んだ歌は右の二首のほかに五首（後述）、全てで七首であり、和歌の全体数に対しごくわずかといってよいことがわかる。[9]少なくとも和歌において「瓶に挿す花」は好んで詠まれる素材ではなかったといえよう。

②　正徹の和歌

検索結果の七首を時代順に見ると、本章①に記した紀貫之・中務の二首のほか、十三世紀初～中期の和歌に次の三首、そして十五世紀初～中期に正徹の和歌二首がある。

玉たれの小瓶にさせる梅の花万代経へき挿頭なりけり

実朝
『金槐集』[10]・賀

あさなあさな仏のためといさなひてかめにさしおく花さくらかな

真観
『宝治百首』[11]・春

見れはまたかめに折さす花の色のやかてもしほむ時はきにけり

光俊朝臣
『新撰和歌六帖』[12]・第一帖・昼、
『夫木和歌抄』[13]巻十九・昼

以下、正徹の和歌である。

(1)いく千世そ梅の花かめさしなから水のうき木にあへる匂は

正徹

(2)折りてさす花そ久しき玉たれのかめのうへなる山さくらかも

正徹
『草根集』[14]

(以上、傍線・番号(1)(2)は筆者の加筆)

右の和歌は、(1)は「瓶に挿す花」を詠んでいる。また「うき木にあへる」とは「浮木に会える亀」すなわち「盲亀の浮木」[15](涅槃経などにある話から、会うことがきわめてむずかしいことのたとえ)を詠んでいよう。

(2)は「瓶に挿す」と明確に詠んではいない。また専順の連歌「さす花やかめのうへなる山桜」に相似している。専順の連歌については次章で述べることとし、以下、正徹の和歌について見ていきたい。

先に記した『後撰和歌集』の紀貫之・中務の和歌はもちろん万人周知のものであったであろう。それゆえに同様に「挿す」・「花」・「瓶(亀)」が詠み込まれている場合、「瓶に挿す花」を詠んだ可能性が見出される。「かめのうへなる山」は「亀の上なる山」即ち「蓬莱山」を一義的には示すとも考えられる。しかしこの和歌の場合、紀貫之・中務の和歌のように「瓶に挿す」と明確に詠まれているわけでなく、花を挿す場所が特定されていない。いうまでもなく和歌において「挿す花」と詠まれたとき、通常考えられるのは「かんざしとして髪に挿す花」を詠むことである。

正徹の歌集である『草根集』を読むと(以下、表1参照)、花を挿頭(かざし)とする場合は必ず「折り挿頭す」と詠んでいる。それゆえに「折りて挿す」と詠んだこの和歌が(傍点は筆者の加筆)、一方で「蓬莱山の不老不死の桜を髪に挿す」という意味を持つということが考えられるものの、他方で(1)に見るように正徹がほかにも「瓶に

表1　『草根集』における「折る」・「挿す」・「挿頭す」・「瓶」・「花」を含む和歌一覧

	歌番号	詞　書	和　　歌	歌　材
1	636	梅久馥	いく千世そ梅の花かめさしながら水のうき木にあへる匂ひは	花（梅）・瓶・挿す
2	678	多年翫梅	春ことにわれをいとはぬ色かゆゑ梅を手折りて老となりぬる	花（梅）・折る
3	1145	翫花	かくるらむよそめそしらぬさくら花折りかさしても老は忘れす	花（桜）・折る・挿頭す
4	1147	翫花	折りてさす花そ久しき玉たれのかめの上なる山さくらかも	花（桜）・折る・挿す・瓶
5	1153	翫花	山さくら折りかさしても花は花老は老とやかくれなからん	花（桜）・折る・挿頭す
6	1154	翫花	老か身をかくさんためと成りぬへし手折らて花を飽くまてやみん	花（桜）・折る
7	1156	翫花	山路行くたもとににほふ花の枝を朝露なから折りてかささむ	花（桜）・折る・挿頭す
8	1157	花挿頭	手折りつつかさす桜の花のかをうつるは老の袖にいとはす	花（桜）・折る・挿頭す
9	1158	花挿頭	をとめ子かかさしの桜かつ散りて雲の袖ふる山風そふく	花（桜）・挿頭す
10	1159	花挿頭	開きみちて春はありとしある人のかさしの花の都ならすや	花（桜）・挿頭す
11	1167	馴花	身におはぬ花をはしひて手折るとも猶家つととえこそ思はね	花（桜）・折る
12	1168	馴花	手折りつつかさす桜の色にこそいとと老いぬる年はかくれね	花（桜）・折る・挿頭す
13	1169	馴花	心なくたをれる花の哀をもしらぬ翁といとと成行く	花（桜）・折る
14	1170	馴花	石はしる滝をしのきて手折りこし枝とや花の浪もちるらん	花（桜）・折る
15	1171	馴花	契あれやたをれる枝にのこりきてわが閨にとく花の下ひも	花（桜）・折る
16	1172	馴花	折りかさす花も時のまおとろへて果はかくれぬ老の春かな	花（桜）・折る・挿頭す
17	1173	馴花	さくら花折りてかささは中中に老いぬる人としるからむかも	花（桜）・折る・挿頭す
18	1333	山花未偏	梅かかも衣におつる雪なからさくらを手折る春の山ふみ	花（桜）・折る
19	1372	行路花	春ことの道の行てに折りすててもとあらの桜花そすくなき	花（桜）・折る
20	1477	寄筏花	山つとに手折りてのする花筏あらくおろすな春の川風	花（桜）・折る
21	1497	寄花釈教	みたれゆく心のままに手折りてそ花をかはらぬ仏とも見ん	花（桜）・折る
22	1786	躑躅	いそくなよ手折るつつしの灯によるの山路はかへりいてなん	花（躑躅）・折る
23	1790	樹陰躑躅	夜こえむ人のためにとくらふ山木の下つつし折りもつくさし	花（躑躅）・折る
24	1842	折藤	手折りつつかさしてゆかん藤なみを浪そふ老のしわとやはみむ	花（藤）・折る・挿頭す
25	1846	款冬	手折るとも人にかたるな山吹の花にわけくる露はおちにき	花（山吹）・折る
26	1881	折款冬	折りかさす心そいはぬかくせ花八十にちかし八重の山ふき	花（山吹）・折る・挿頭す
27	2028	余花	山さくら花こそのこれ一枝をけふのかつらに折りやうゑまし	花（桜）・折る
28	2030	余花	夏もみる春の湊かさし藤の波に雲ゐる山さくら花	花（藤）・挿す
29	2659	瞿麦	手折るなよまたいときなき黒髪をなつるにまさる撫子の花	花（撫子）・折る
30	2678	樗	手折りてもいたくは人のめてさらむ木に花見えぬ比の樗を	花（樗）・折る
31	2684	林間樗	折りはてし林のわらひ紫のちりの行へにちるあふちかな	花（樗・蕨）・折る
32	3488	隣槿	折りとらぬ色こそあかね中垣の花のぬしある宿のあさがほ	花（朝顔）・折る
33	3490	隣槿	一枝もをりはやつさし開く花のあるしよそなるにはのあさがほ	花（朝顔）・折る
34	4735	行路萩	玉鉾の行ての小萩折りとらはのこれる花の色やあせなむ	花（萩）・折る
35	4828	山紅葉	わび人の手折る山ちの下紅葉涙しぐれて色やまさらん	紅葉・折る
36	5087	時雨似秋	ちらぬ枝を折りさす庭のもみち葉に時雨れて秋ののこる冬かな	紅葉・折る・挿す
37	10005	旅宿	岩かねに枝をりかけてふし柴のこるはかりなる嵐をそきく	柴・折る

＊　本表作成においては、国際日本文化研究センター　和歌データベース「草根集　正徹」を使用。

表 2　「花」・「瓶」・「挿す」を含む中世連歌一覧

	句	発句	作者	西暦	和暦	作品集名・賦物
1	かめにさす-はなさくらとの-うちとかな	○	親当	1448	文安 5	親当句集
2	さすはなや-かめのうへなる-やまさくら	○	専順	1452	宝徳 4	宝徳千句・第五・唐何
3	かめにさす-うめのひとえだ-ちるをみて		宰相	1452	享徳元	初瀬千句・第六・何袋
4	かめにさす-みついつのまに-かわくらむ		行助	1455	享徳 3	行助句集
5	かめにさす-はなのうめかえ-はるまちて		専順	1475	文明 7	専順独吟
6	かめにさす-はなのさかりは-みしかくて		能阿	1476	文明 8	竹林抄巻一
7	かめのさくらの-かをなたつねそ		賢盛	1476	文明 8	竹林抄巻一
8	さかりをみはや-かめにさすはな		眼阿	1482	文明14	文明万句・第五千句・第五・二字反音
9	かめにさす-はなのあさかほ-ひにさきて		宗長	1482	文明14	大原三吟
10	かめにさす-くさのあさつゆ-しろたへに		基佐	1482	文明14	大原三吟
11	かめにさせ-こふをつくさむ-はるのはな	○	後成恩寺入道前関白太政大臣	1495	明応 4	新撰菟玖波集・巻十九・発句上
12	かめにさす-しけきこすゑの-はなのつゆ		兼載	1501	文亀元	園塵第三・春
13	をりそへし-はなをはかめに-さしいてて			1522	大永 2	伊勢千句・第四・薄何
14	かめにさす-はなはうききか-はるのやと	○		1552	天文21	天文年間百韻
15	かめにさす-はなのたちえの-ちるもをし			1557	弘治 3	弘治三年春雪千句・第十・山何
16	かめにさす-うめはかをりも-ふかからて			1560	永禄 3	永禄年間百韻・何路
17	かめにさす-はなにこもれる-のやまかな	○		1571	元亀 2	元亀二年千句・第七・初何
18	かめにさしぬる-はなのひめゆり			1576	天正 4	天正四年万句・第四千句・第四・何垣
19	たをりきて-かめにさしおく-はなのかけ			1576	天正 4	天正四年万句・第六千句・第八・二字反音
20	かめにさす-ふちやまふきや-はるのいろ			1584	天正12	天正年間百韻・初何
21	かめにさす-はなをこてふの-もとめきて					亀戸天神七百七十年千句・第六・二字反音

＊　検索は、「連歌・和歌・俳諧検索システム　Keiko II」国際日本文化研究センター発行、「国際日本文化研究センター連歌データベース」を使用。

挿す花」を詠んでいること、(2)において「瓶」が詠み込まれていることと相俟って、「瓶に挿す花」を詠んだことも考えられる。

また、およそ(2)の和歌と同時期以降に、「瓶に挿す花」を詠み込んだ連歌が詠まれ、それらが正徹の和歌の弟子である親当[16]・専順（後出・第2章①）・行助[17]といった連歌師によって詠まれていることから（表2参照）、少なくとも「瓶に挿す花」という素材が和歌・連歌というジャンルの違いを越え、正徹からその弟子たちの間に共有され、素材として使用されるようになっていったのではないかと思われる。筆者の「瓶に挿す花」の検索以外で見出される和歌に[18]、正徹の和歌の弟子による「ならさじよかめに折り挿す梅が香の扇のかぜにみだれてぞちる」（正広『松下集』四八四番）があることも付け加えておきたい（傍線は筆者の加筆）。他方、素材として使用する場合、「瓶に挿す花」が身近な場面に存在したり、談話のなかに含まれることがあったことが推

表 3　『碧山日録』における花の記事一覧

	西暦	和暦	月　日	種　別	記　　事	備　　考
1	1459	長禄 3	2・5	奪花	稲荷山丈室懺摩之会	年々大有瓶葩之設
2	1459	長禄 3	2・22	天神	挾梅花之枝	北野天満神
3	1459	長禄 3	2・23	天神	挿紅梅一朶	天神像（宰府）
4	1459	長禄 3	3・3	観花	桜盛開、賞之	花見
5	1459	長禄 3	3・8	観花	梅・無香の説	
6	1459	長禄 3	3・23	観花	伏見里之杜鵑花盛披、可与公相従賞之	花見　他
7	1459	長禄 3	4・8	仏前供花	仏生日、献花焼香礼三拝	
8	1459	長禄 3	4・10	観花	開花窓見桐花、其花房自秋末而萌	
9	1459	長禄 3	4・14	観花	葵花向日・柳絮・松	
10	1459	長禄 3	4・28	仏前供花	掛十六応真像、各置紅白剪花一瓶	特撰巧手剪状群花
11	1459	長禄 3	4・28	奪花	剪花造門	剪葩者道路如織
12	1459	長禄 3	5・4	節句	明日擷蓬与菖蒲	
13	1459	長禄 3	9・9	植栽	雨、大風、不賞心起於菊花	
14	1459	長禄 3	11・13	植栽	命僕鋤地下金銭花之種	
15	1459	長禄 3	11・29	挿花	折梅挿瓦器、雖未発花、春意隠然也	
16	1459	長禄 3	12・4	挿花	挿梅枝於瓦瓶、夜深点灯、其影可愛也	
17	1460	寛正元	正・24	観花	春公来、遊後園而看梅	
18	1460	寛正元	2・27	挿花	中書令勝秀公遣其客乞梅、折数枝与之	
19	1460	寛正元	3・16	奪花	六条街、看花・奪花	
20	1460	寛正元	3・22	挿花	庭前紫荊盛開、折之挿於瓦器	
21	1460	寛正元	4・1	観花	紅白既散、新緑又描	
22	1460	寛正元	4・11	観花	藤蔓盛開、賞之	
23	1460	寛正元	6・17	挿花	有寄楊梅一枝、余投之春公	
24	1460	寛正元	6・17	挿花	春公楊梅一枝挿銅瓶、為明日高客之設云	
25	1460	寛正元	9・9	節句	重陽、黄花・般若之話	
26	1460	寛正元	閏9・9	節句	拾残菊	
27	1461	寛正 2	正・13	観花	以梅花脳為話	隣僧来、設斎
28	1461	寛正 2	2・18	観花	国家大臣某賞東渓之梅	
29	1461	寛正 2	2・20	植栽	接花	
30	1461	寛正 2	4・7	仏前供花	仏前瓶花	余十歳時
31	1461	寛正 2	10・9	植栽	移小金菊・竜胆草於前庭、又蓮根種東面之池	
32	1461	寛正 2	10・19	観花	見楓葉	遊東邑北斗院
33	1462	寛正 3	正・26	観花	前庭梅花盛開、掲簾賞之	以招浄居紹蔵主及余

34	1462	寛正3	2・25	挿花	春公招専慶、挿花草於金瓶者数十枝	洛中好事者来競観之
35	1462	寛正3	2・27	観花	偕看東渓之残梅	法泉衍首座、一両輩而来
36	1462	寛正3	3・6	観花	泛河見北岸之花	光禄持清公赴伏見之永明
37	1462	寛正3	3・16	観花	偕見天徳之桜花於牆外	開座掲簾
38	1462	寛正3	3・17	植栽	栽白蓮於東面之池	
39	1462	寛正3	5・12	挿花	広徳恵余以白薔薇数枝	乃挿之地也、欲生其根也
40	1462	寛正3	10・2	挿花	専慶来、折菊挿於瓶、皆嘆其妙也。等持首座、寄紫色菊於公、未有此種	春公、設施食会、与諸僧相会
41	1462	寛正3	11・5	挿花	折残菊挿瓶	
42	1463	寛正4	3・1	観花	諸兄胥率賞梅於渓東	予述作詞而共不赴之意
43	1465	寛正6	2・1	奪花	毎幅之前、有瓶花供、緇素争奪花枝	丈室有修懺之会、観世音之像三十三
44	1465	寛正6	2・2	奪花	問琴渓、以瓶花之争為話	
45	1465	寛正6	2・21	植栽	見子庭所掃石菖蒲	遊清浄庵
46	1465	寛正6	2・22	観花	仏乗院有桃樹一株、甚盛	与諸彦相過賞之
47	1465	寛正6	2・23	植栽	知足九淵和尚求稚松栽	贈以両三株
48	1465	寛正6	2・24	観花	永安庭前、有梅数十株、紅白交加	是日設斎而見招
49	1468	応仁2	正・18	観花	後藤拉朶梅見来訪	又話以所賦之詩
50	1468	応仁2	正・25	観花	過大仙而見庭梅	咸時花濺涙之句、快然蝕壊也
51	1468	応仁2	2・6	観花	伯侍者見寄紅白梅数枝	乃挿於東窓愛之
52	1468	応仁2	2・18	観花	発花紅白而無数	西園有小梅樹、其長一尺許、移之前庭、而愛賞
53	1468	応仁2	2・21	植栽	得牽牛花之子、種之東籬	又改移薬苗数品
54	1468	応仁2	3・2	植栽	新熊野神祠之南、有種花者	而花梢与座相接
55	1468	応仁2	3・9	観花	永明之桜盛開、共遊其下也	梅西求赴其房、乃応命
56	1468	応仁2	5・13	植栽	種紫瓜之子	命僕治園
57	1468	応仁2	5・21	観花	庭下、白薔薇・紫杜蘅、其開甚盛	其開甚盛、招一二隣友、共賞
58	1468	応仁2	6・19	植栽	開東地、而植細竹数本	
59	1468	応仁2	9・10	節句	忘昨日乃菊節、以自咲	
60	1468	応仁2	10・6	挿花	村僧某恵菊花数本	乃挿瓶賞

表4 『経覚私要鈔』における花の記事一覧

	西暦	和暦	月　日	種　別	種　別の詳細	記　事　内　容
1	1417	応永24	7・7	節句	二星法楽	花少々在リ
2	1436	永享8	10・8	宗教行事	十八道心加行	花□兼摘入置之・毎座花進之
3	1443	嘉吉3	6・27	花瓶	花瓶一	法雲院へ遣わす
4	1444	嘉吉4	正・8	花瓶	花瓶一	慶寿局へ行ったときの引出物
5	1444	文安元	2・15	花瓶	花瓶一双	引き出物、卓あり

6	1447	文安 4	2・1	宗教行事	修二月会	花餅以下立てる
7	1447	文安 4	8・1	花瓶	花瓶胡銅一	花瓶一胡銅、禅定院より
8	1448	文安 5	10・13	花見	花見	白毫寺、古市胤仙・紅葉
9	1448	文安 5	12・27	花瓶	花瓶胡銅一	花瓶一胡銅遣わす
10	1449	宝徳元	6・18	供花	供花	九条供花
11	1449	宝徳元	8・1	花瓶	花瓶一	九条家の憑として
12	1450	宝徳 2	2・15	花の贈答	花の贈答	コブシノ枝済々賜い、賞翫
13	1450	宝徳 2	4・16	花の贈答	花の贈答	白眞一本を三宝院門跡義賢に遣わす
14	1450	宝徳 2	8・1	花瓶	花瓶胡銅一	禅定院、尋尊
15	1450	宝徳 2	12・13	花瓶	花瓶一	立野信福寺子の奉公の為進物、ほかに扇、杉原十帖
16	1451	宝徳 3	2・4	花瓶	花瓶胡銅一	祐盛の子如意の寿物
17	1451	宝徳 3	2・17	花見	花見	梅一重開枝見来者
18	1451	宝徳 3	2・21	花見	花見	京都花少々開廿四五日比
19	1451	宝徳 3	2・21	花瓶	花瓶一	唐橋在豊から、賀茂社上粉の事につき
20	1452	宝徳 4	5・10	花瓶	花瓶	花瓶を召し下すため人夫を京都に上す
21	1453	享徳 2	正・27	花の贈答	花の贈答	如意賀丸、正月桜希代事・桜花一枝持参
22	1453	享徳 2	2・12	花の贈答	花の贈答	縁瞬から給之・コブシノ花一枝
23	1453	享徳 2	2・12	花見	花見	地蔵院前、酒宴
24	1453	享徳 2	2・13	花見	(花見)	花見延引
25	1456	康正 2	正・5	花瓶	花瓶胡銅一	尋尊へ遣わす
26	1459	長禄 3	正・5	花瓶	花瓶一	遣尋尊、来臨お礼として尋尊へ遣わす
27	1459	長禄 3	2・1	立花	立花	梅花を立てる、数十瓶
28	1459	長禄 3	2・16	花の贈答	花の贈答	醍醐(義賢)へ遣わす・春菊
29	1459	長禄 3	3・5	花見	花見	古市城において花見
30	1459	長禄 3	3・8	花見	花見	白毫寺花盛り、見物貴賤
31	1459	長禄 3	3・9	花見	(花見)	雨連続、無念
32	1459	長禄 3	3・10	花見	(花見)	雨
33	1459	長禄 3	3・14	花見	(花見)	藤千代（尋尊児）に招かれるが、湯治中につき謝絶
34	1460	長禄 4	正・5	宗教行事	散花	但馬屋講問
35	1460	長禄 4	正・5	花瓶	花瓶一胡銅	経覚、尋尊へ賀物を贈る
36	1460	長禄 4	正・23	花瓶	花瓶一	入院礼謝
37	1460	長禄 4	3・2	花瓶	花瓶	染付立子花瓶一
38	1460	長禄 4	3・20	花見	花見	東福寺内菩提院
39	1460	長禄 4	3・20	立花	立花	東福寺、□廊立花翫短尺云々
40	1460	長禄 4	10・13	花瓶	花瓶胡銅	大聖院斎尊子息食い初め祝い、金覆輪一ほか

41	1461	寛正2	2・15	花見	花見	白毫寺桜
42	1461	寛正2	2・26	花見	花見	浄土寺遊覧
43	1461	寛正2	2・26	花見	花見	白毫寺桜花遊覧
44	1461	寛正2	2・26	花見	花見	花令歴覧、浄土寺、白毫寺
45	1462	寛正3	3・6	花見	花見	上洛・五条辺りに宿す
46	1462	寛正3	4・5	花見	花見	義賢、蹴鞠見事、経覚を誘う
47	1462	寛正3	4・15	花見	花見	東福寺の萩（4・14も）
48	1462	寛正3	5・22	花瓶	花瓶一卓	縁舜法眼養子栄藤、経覚に謁す。経覚遣わす
49	1462	寛正3	5・26	花の贈答	花の贈答	かきつばた、法花寺より贈られる

し量られよう。

それでは正徹が過ごした東福寺と「花」とは、どのような関わりがあったのであろうか。

③ 東福寺禅僧の「花」

正徹と同時期を東福寺で過ごした太極蔵主[19]（以下、太極と記す）は日記・『碧山日録』[20]を残し、その長禄三年（一四五九）五月十一日条には正徹の死を記している。同日録から東福寺禅僧が「花」とどのようにかかわっていたのかを見ていくことにしたい（以下、表3参照）。

同日録の花（植物）や「花」（いけばな）に関する記事において一番多いのは、太極をはじめとする禅僧たちの観花、いわゆる花を愛でる記事である。花の種類は圧倒的に梅であるが、さつき、桐花、薔薇、藤などのこともある。

次に多いのが植栽についての記事である。松や竹を植えたり、蓮を池に浮かべたり、菊をはじめとする草花を植え替えたり、種[21]や根を大切にし、菊や蓮、瓜、金盞花、薔薇を栽培していたことも窺える[22]。

花を挿す記事も同数程度みられる。太極は瓦器に挿した梅から春の訪れを感じたり、瓦瓶（素焼き土器の瓶）に梅枝を挿し、夜の灯火に映るその影をいとおしんだり、庭の紫荊（ハナズオウか？）を手折って挿したり、村の僧から贈られた菊花を瓶に挿して愛でたりしている。器は、客などに見せるときは金や銅の瓶であったが、自らが楽しむときは瓦瓶を使用した。

東福寺の公の場の供花は禅僧自身が管理しており[23]、身近な「花」を観賞や造形の対象としていた禅僧たちによって供花が挿されることにより、供花もそのような対象になって行ったと思われる。また同寺の稲荷山懺摩之会の供花などでは、花材を僧侶・俗人が奪い合っているが[24]、草花の美しさのほか種の入手などの植栽的な関心もあったのであろうか。

『蔭涼軒日録』[25]文正元年（一四六六）二月十日条には、足利義政の東福寺御成の際、観音三十三幅の前に唐織物打敷を掛けて大瓶に花を挿し、客殿南面広縁には大瓶或は飯銅（花器の一種）に大松或は梅花が挿されたことが記されている。東福寺の供花は将軍義政も関心を寄せるものであり、この御成は畠山氏ほか諸大名も臨席するものであった。また『経覚私要鈔』[26]には、寛正三年（一四六二）四月十五日条に経覚が東福寺へ萩の花見に出向いたことが記されるなどしている（表4参照）。

これらのことから、東福寺は供花、瓶に花を挿すこと、植栽、観花いずれに関しても盛んな場所であったことがわかる。

他方、『碧山日録』には先に記したように禅僧同士花見に行ったこと、太極や禅僧たちの花を愛で育てるといった自らの趣味や関心事としてのほか、北野社家など、禅僧以外の人々の「花」とのかかわりも記している。「花」に関心を持っていたのは春公[27]や専慶（後出・第2章④）、太極だけでなく、義政（将軍家）、武家、禅僧、社家、村の僧、町衆（洛中好事者）というように、幅広い層においてであったことがわかる。

また禅僧たちの「花」とのかかわりからは、「花」というものが決して座敷飾りという「花」が置かれる場のみが問題とされるのではなく、花を育て愛で楽しむということの延長線上に、花を瓶に挿して楽しみたいという思いが加わり、「花」の形を成していったことが考えられる。それとともに正徹が「瓶に挿す花」とかかわりのある世界にいたことが窺えよう。

2　専順と「瓶に挿す花」

①　専順の存在

京都六角堂頂法寺住僧の連歌師・専順は、宗祇の師であり『竹林抄』において連歌七賢[28]の一人に選ばれるなど、連歌の実力者であった。『大乗院寺社雑事記』[29]文明八年（一四七六）四月二日条においても、「連歌名人」の「六角堂柳本坊専順法眼」が同年三月二十日に没したと記している。『梅庵古筆伝』[30]によれば同年で六十六歳であり、このことにより応永十八年（一四一一）の生まれとなる。

専順の連歌作品と連歌師としての動向が国文学において研究対象となるなかで、専順の伝記について石村雍子氏（国文学）は『華道家元　池坊由来記　全』[31]から、専順が「文明四年に花傳を確立し」、「連歌の席に連なり、また義政等の為に華道を講じ」、立華、砂の物、生花を案出分類し、「立阿弥とは法躰の立華家、即ち池坊の事である」等の内容を引用している[32]。同様に福井久蔵氏（国文学）も専順について、「六角堂の池坊専順は花の宗匠として法眼に叙せられ、斯道に立華・砂物・生華の三様を立てた異才であるが」と記しているが[33]、古記録にそのような事実は見当たらず、今日において『華道家元　池坊由来記　全』に記されているような説が引用されるこ

とはない。

しかしここで問題としたいのは、歴史学において専順はもとより立阿弥や「花」について研究がなされ、立阿弥と池坊が異なることや、立花・砂物・生花が江戸期の花型であることが実証されている[34]にもかかわらず、こうした歴史学の研究成果がここで引用されなかったことである。

他方、歴史学の研究においても、国文学の研究成果が生かされているとはいいがたい。右の国文学研究者による専順についての引用は、前記した、大正末期に出された著述（『華道家元　池坊由来記全』）が詳細に検討されずそのまま記されたものであり、現在の国文学研究のうえでは専順は連歌師としてのみの存在認識であろう。木藤才蔵氏に至っては、「専順が立花の方面で画期的な業績を残したという伝えには疑問なきを得ない」と述べている[35]。それに対し歴史学の研究は、依然として専順が連歌において「瓶に挿す花」を詠んでいるから「花」にかかわっていたと考え[36]、『禅鳳雑談』に記された「池ノ坊の花の弟子」をはじめとする「池坊」が、専順ではないかとしている[37]。

これらのことを踏まえて以下、連歌素材としての「瓶に挿す花」の使用、専順と「花」・「池坊」との関係、当該期の「池坊」・六角堂の存在について考えたい。

②「瓶に挿す花」

専順は、連歌師であるとともに「花」に携わっていたから「さす花やかめのうへなる山桜」と詠んだのか、それとも連歌師として連歌の作法に則り、花（桜）の句の一つのバリエーションとして詠んだのかを考えてみる（表2参照）。

さす花やかめのうへなる山桜　　専順

この句[38]は、宝徳四年（一四五二）春に詠まれた『宝徳千句[39]』・第五・唐何の発句である。この『宝徳千句』は各発句に花（桜）を詠み込んでいる。

折りてさす花そ久しき玉たれのかめのうへなる山さくらかも　　正徹

この和歌（前出・第1章②）と比べると、「さす花」・「かめのうへなる山さくら」の部分は全く同じである（以上、傍線は筆者の加筆）。正徹の和歌は制作年代が確定できず、どちらの歌が先に詠まれたのかは明確にはならないが、和歌と連歌というジャンルの違いがあろうとも、師匠格である正徹の和歌を専順が模すことはあっても、当代きっての歌人正徹が専順の句を模することがあるのであろうか。

一概には言えないという見方も一方にはあろうが、専順が正徹の和歌を模したとすると、自らの花を挿す行為を詠んだものとは言い切れないと考えてよいであろう。模して作ること自体は作法の一つであり差し支えないし、出来ばえが本歌を超えることさえある。

また専順の発句に、伊勢国司家臣の日晟が「柳のしづえねそ目くむらん」と脇句を付けている。発句を脇句とともに考え一つの世界を詠むという連歌の手法からは、美しく咲き誇る山桜と芽ぐむ柳といった春の風景が詠まれたことになる。しかし他方で、正徹の和歌同様「かめのうへなる山さくら」を蓬莱山の不老不死の霊験あらたかな桜と見、その桜を挿頭に挿せば老いが遠のく、と詠んだことが考えられる。それとともに正徹の和歌が「瓶に挿す花」を詠んでいるならば、専順のこの句も「瓶に挿す花」を詠んでいることが考えられるし、正徹の和歌においても言えることであるが、「髪に挿す花」と「瓶に挿す花」の両方の意味合いを持たせたことも考えられよう。

しかしそれ以前の問題として、連歌のデータベース（表2参照）の「瓶に挿す花」を詠んだ連歌をみてみると、専順以前に蜷川親当[40]が「瓶にさす花さくら戸の内外かな」（『親当句集[41]』）を詠んでいる。親当は専順以上に正徹と親交があった人物である。[42]親当と専順（ともに連歌七賢）においても親交があり、歌材の影響を及ぼしあうことがあったことは考えられるが、これをみても決して専順が最も早く「瓶に挿す花」という素材を連歌に持ち込んだわけではない。

また享徳元年（一四五二）、『初瀬千句[43]』・第六・何袋において、宰相[44]の「瓶に指す梅の一枝散を見て」に、春鶴丸が「春は心の花そ色なる」を付け、「瓶に挿す花」が詠まれたが、専順も連衆として参加している。専順であるからといって必ずしも、「瓶に挿す花」を詠むわけでなく、「瓶に挿す花」を詠むことは選択肢の一つであった。

連歌のデータベースの検索結果（表2参照）からは、これ以後「瓶に挿す花」という素材が詠まれていることがわかる。それは十五世紀中期に記された『看聞日記[45]』や『山科家礼記[46]』の記事において、「花」が注目され始めた[47]こととも合致し、連歌において「瓶に挿す花」を詠むことと「花」の流行とは相関関係にあるといえる。しかし和歌に詠まれるのはわずかである。「たて花」という行為が、決して和歌の世界が好む雅なものとして受け取られなかったことを意味するのであろうか。

以上のことより専順が連歌師として連歌の作法に則り、花（桜）の句の一つのバリエーションとして「瓶に挿す花」を詠んだことは考えられるが、この句を以って専順が「花」に携わっていたとは言い切れないであろう。

さらに専順は文明七年（一四七五）『専順独吟[48]』において、「かめにさすはなのうめかえはるまちて」と「瓶に挿す花」を詠んでいる。

しかしすでに「瓶に挿す花」は連歌素材として他の連歌師も詠んでおり（表2参照）、この句を以ってしても専順と「花」を結びつけることは難しいといえよう。

③「池ノ坊の花の弟子」

『禅鳳雑談』[49]に記された「池ノ坊の花の弟子[50]」が専順ではないかということについて、その理由として「連歌と花とは、花の下の連歌というように密接な関係があったから、たて花師が連歌師であって不思議ではない」と述べられることがある[51]。しかしこれは少なくとも史実に基づいたものとはいえないのではないだろうか。また、専順は先に記したように六角堂「柳本坊」法眼として記録に残っているのであり、「池坊」としては出てこない。

以下、『禅鳳雑談』における「池ノ坊の花の弟子」が記された一節を見てみる。

> 珠光の物語とて、月は雲間のなきは嫌にて候。これ面白く候。池ノ坊の花の弟子、花のしほつけの事、細々物語り候。是も、得して面白からせ候はん事、さのみ面白からず候。
>
> 『禅鳳雑談』（傍線は筆者の加筆）

右の記事からは、「池坊」と「花」との関わりが見出せ、この「池ノ坊の花の弟子」という人物が、「花」に対して一家言ある人物とはいえる。

しかし「池ノ坊の花」ということに注目すると、「花」に関する記事が多く見られる『山科家礼記』において池坊の「花」の初見は、文明十三年（一四八一）二月二十二日条「池坊はな一見候」であり、池坊の「弟子」ということに注目すると、『実隆公記[52]』において「池ノ坊の弟子」の初見は、長享二年（一四八八）十月四日条「小御所華可拝見之由被仰之、池房弟子立之云々」である。いずれにしても専順が没した後に「池ノ坊の花」や「池ノ坊の弟子」の初見記事は見出される[53]。

他方、同雑談において連歌については、「専順の連歌の事[54]」というように専順の名前が明記されており、『禅鳳雑談』に記された「池ノ坊の花の弟子」が、そのまま専順であると考えるこれまでの認識には問題も多い。

それでは「池坊」や「六角堂」は、専順が生きた時代に記された古記録において、どのような場所として記されているのであろうか。以下見ていきたい。

④ 池坊・六角堂の存在

『蔭涼軒日録』寛正四年（一四六三）八月二十六日条には「池坊」

が見出される。以下見ていくと、

（前略）暁来雨降矣。六角堂号頂法寺也。修行池坊法華経一部。被献于道場也。即遣之。　（枠は筆者の加筆）

右の記事からは、六角堂が頂法寺と呼ばれ、そこに執行（修行）職にある池坊という僧侶がいたことがわかる。

さらに『碧山日録』からは二ヶ所「池坊（池房）」が見出される。最初に、寛正三年（一四六二）七月二十四日条を見てみよう。

午而勝秀公[55]来、先成茶酌也、公之客相従者藤堂某・下河原某・一村某・懸篭某・済藤某・長江某等也、春公[56]、後将池房某而来、咸携珍果・美饌及柳家之物、又田楽徒（以下省略）

（枠は筆者の加筆）

右の記事について細川護貞氏は、「春公、後将池房某而来」を「春公、後（おく）れて池房某を将（ひき）て来る」と読み、「池房某」を専慶としている。[57]

しかしこの記事を挟んで同年二月二十五日条・十月二日条において（本節・専慶の史料(2)・(3)）、太極は「専慶」のことを「専慶」と記している。当時の日記において、一人の人物を筆者が複数の呼び方で記すことは見うけられることではあるが、「専慶」をことさら「池房某」と記すであろうか。果たしてこの「池房某」は専慶であると言い切れるのであろうか。

次に、長禄三年（一四五九）十月二十五日条に「赴性海之斎、与春公問　池房主人、」とあるが、「修行池坊」や「池房某」の記事と同様に、この「池房主人」の記事からも、「花」との明確な繋がりを見出すことはできない。

それでは専慶とはいったいどのような人物だったのであろうか。専慶[58]は今日、花道家元・池坊[59]の元祖・池坊専慶として位置づけられている。専慶が生きた時代の専慶に関わる史料は同日録においてのみと思われ、次のように見出される。

(1)寛正二年（一四六一）四月十六日条　甲戌　与長法寺之専慶、相会於春公之宅、慶久司其寺務、仍問聖徳太子之事迹、共論其伝之詳略、

(2)寛正三年（一四六二）二月二十五日条　庚寅　宿雨不晴、春公招専慶、挿花草於金瓶者数十枝、洛中好事者来競観之、（以下省略）

(3)同年十月二日条　春公為王大父霄岸、設施食会、与諸僧相会、

専慶来、折菊挿於瓶、皆嘆其妙也、（以下省略）

（枠は筆者の加筆）

右の記事からは、(1)から専慶が長（頂）法寺[60]の寺務を長らく司ってきた者であることがわかる。しかし(2)(3)から専慶がかなりの「花」の上手であったことや春公と専慶の間に交際があったことはわかるが、専慶と「池坊」との関係は記されていない。

先の『蔭涼軒日録』の記事を池坊が頂法寺の執行であると読み、史料(1)において専慶を頂法寺の執行と読んだとしたならば、池坊と専慶とは同一人物ということもできなくはなかろう。しかし確証を欠くのではないだろうか。

専慶を花道家元・池坊の元祖とする根拠は、慶長四年（一五九九）東福寺の月渓聖澄[61]が『百瓶華序[62]』に、「由是有寺号頂法。当其乾之方有深居。名曰池坊。累代以立華於瓶裡為家業。其元祖曰専慶。自専慶至于今之池坊専好法印。累十三葉。法印以華馳名。」（枠は筆者の加筆）と記していることによるものと思われるが、専慶から（初代）専好[63]までの間をおよそ百三十年として、その間が十三代ということは、一方で、史料(1)では専慶が寺務を長らくやっているということに対し、一概には言えないが各代の間隔が非常に短いといえないだろうか。確実な考証が今後の課題となるが、もう少し時代が溯る人物ということも考えられよう。『百瓶華序』の専慶が『碧山日録』の専慶と同一人物といえるかどうかについて疑問は残る。

また、この記事はまさに池坊（初代）専好が活躍している時期の、「花」を家業とする「池坊」の存在というものが定まった後の史料である。寛正年間の六角堂頂法寺ならびに「池坊」の様子をそのまま言い表しているのではなかろう。

『碧山日録』において六角堂の記事が見出されるのは、寛正二年（一四六一）二月二日条「願阿、於六角長法寺南路、為流民造茇舎十数間（以下省略）」と同年同月十三日条「六角坊之茇舎、是日、流民死九十七人也」においてである[64]。

これらの記事からは、六角堂が飢饉の場合における救済の場になっていたことがわかる。大飢饉の世評と「花」の流行の世評とを同列に論ずるべきではないが、「花」に関する記事の多い『碧山日録』のことでもある、もしも六角堂頂法寺で同時代に盛大に「花」がおこなわれていたなら、その記事が同書中に見られてもよいと考えるが、見られないことから、六角堂頂法寺の「花」自体、世評になるほどのものではなかったのではないだろうか。

同時期の古記録である『蔭涼軒日録』や『経覚私要鈔』においても、六角堂は革堂、清和院、吉田寺、長楽寺、清水、六波羅とともに七観音の一つに数えられる名高い霊場[65]であり、七観音参詣がなされる場であることについてはしばしば記されている[66]。

以上において当該期の史料からは、寛正年間、六角堂頂法寺に

「池坊」という執行が存在し、六角堂頂法寺に専慶という「花」の上手な寺務を司る僧侶が存在したということはいえよう。しかしそれはこれ限りで終るべき話題であって、専順が生きた時代に「花」を家業とした「池坊」が存在したと、早々と納得してもらっては困るのである。

⑤『経覚私要鈔』と専順

『経覚私要鈔』からは専順の記事が見出せる。しかしそれは連歌会の中においてのみである。常に「京都六角堂法師」という肩書きで、宝徳二年（一四五〇）から宝徳四年までの間に、古市胤仙[67]の連歌会に二回[68]、経覚の連歌会に二回[69]参加したことが記されている。経覚の連歌会では、専順に綿一屯・太刀一腰、あるいは用途百疋が贈られていることから、専順は経覚に乞われて連歌会に出向いていたのであろう。それ以後に見られる専順の記事は、京都での幕府連歌会の出席者を経覚が伝え聞いて日記に記したものである。

『仙伝抄[70]』（後出・第4章①）に連歌の花についての一条が見出されるように、連歌会が頻繁に記されたのであれば、そこに「花」に関するなんらかの記事があるように考えられるが、『経覚私要鈔』の連歌に関する記事は主に発句や連衆（参加者）についてであり、一度たりとも連歌の「花」に関する記事を見出すことはできない。

しかし『経覚私要鈔』では、「花」に関しては仏前供花、花材の贈答、花瓶の贈答などの記事があり、経覚本人が「花」を好むと好まざるとにかかわらずその生活の中に「花」があったことを窺わせ、九条家出身の僧侶の生活が「花」と全く無縁ではないことを感じさせる（表4参照）。

このようななか、『経覚私要鈔』において専順は六角堂法師・連歌師としてのみ存在し、「花」や「池坊」とのかかわりは見出せない。

⑥ 池坊の系図と専順

それではいつ、何のために専順は池坊の系図に入れられたのであろうか。慶長四年（一五九九）、東福寺の月渓聖澄は『百瓶華序』（前出・本章④）に次のように記している。

（前略）夫以洛陽繁華之地。有所名六角。真市中隠也。由是有寺号頂法。当其乾之方有深居。名曰池坊。累代以立華於瓶裡為家業。其元祖曰専慶。自専慶至于今之池坊専好法印。累十三葉。法印以華馳名。（以下省略）

（枠は筆者の加筆）

ここには「池坊」が「華を立てる家業」であったことについては記されているが、専順についての記載はない。専順が池坊系図に登場するのは、十八世紀初・中期の「花」の諸流派勃興期に、「池坊」

が自流の歴史的権威付けのため元文四年（一七三九）に作成し、延享三年（一七四六）林大学頭信充[71]から認証を受けたとされる系図であろう。[72]

「池坊立花正統系図」[73]

一二専慶＊→一三専慮→一四専盛→一五専言→一六専草→一七専来→一八専尊→一九専曙→二〇専光→二一専倫→二二専諱→二三専諷→二四専琳→二五専意→二六専順→二七専鎮→二八専応→二九専存→三〇専栄→三一専好（初代）→三二専朝→三三専存→三四専養→三五専好（二代）→三六専純

（番号・枠・専好の初代・二代は筆者の加筆）[74]

＊「敏達天皇後胤、妹子大臣十二代之孫」と明記されている。「妹子」とは小野妹子。

三六代（世）専純以後、この系図は継承者が付け加えられて今日に至っている。同時期を生きたはずの専慶と専順が、一二代と二六代というようにかけ離れて位置しており、不可思議な系図に思える。また『百瓶華序』において「累十三葉」と記された専慶から専好（初代）の間は、この系図では十八人が存在し、一致しない。

何にせよここで専順が池坊の系図に入れられた理由を考えるなら、六角堂法師の身分を持つ連歌師として名を残していることと、名前の「専」の字が共通していたことがあろう。専順という六角堂法師でありかつ著名な連歌師という存在を系図に持ち込むことは、同じく頂法寺内にあった「池坊」の存在の正当性を主張するために必要であったのであろう。

しかし「専」の付く名前を持つ僧侶であるならば、『蔭涼軒日録』の禅僧からは見出されない[75]というものの、『大乗院寺社雑事記』においては連歌師・専順を含め五十五名もの「専」が付く僧侶の名前が見出され、専順という名前の僧侶については連歌師・専順の他にも二名の専順が存在していたことがわかる。[76]「専」の付く名前であるからといって必ずしも池坊の僧侶ということにもならない。

また現存する専順の花伝書については、西村勉氏が「巻末が早く逸失したものか年記や相伝者を示す奥書はない」と解説されている[77]ことから、同花伝書の制作年は特定できず、従って専順の生きた時代の史料であるとは言い切れないであろう。

3　「挿す花」と「立てる花」

連歌・和歌においては「挿す花」と詠まれるものが、一方では何故「たて花」といわれるのであろうか。同時期の古記録を読むと、公家の日記である『看聞日記』・『山科家礼記』・『言国卿記』[78]においては「花」は「立てる」と記され、禅僧の日記である『碧山日

録』・『蔭涼軒日録』においては「挿す」と記されるという、明確な相違があることがわかる。[79]

「挿す」・「立てる」の使用については、『経覚私要鈔』長禄四年（一四六〇）三月二十日条に、東福寺で「花」が「立てられた」ことが記されていることから、公家（九条家）出身の僧侶・経覚は「花」を「立てる」と記していることがわかる（表4参照）。それとともに、『碧山日録』において瓶花も供花も全て「挿す」と記された東福寺の「花」を、経覚が「立てる」と記している。このことから、「挿す」と「立てる」という言葉の使用が、禅僧社会・公家社会それぞれの「花」に対する慣習的な使用であったことが考えられる。

また、ほかに「供花は立てる」、「瓶花は挿す」という区別があるのではないかとも考えてみたが、「花」を「挿す」と記している『碧山日録』の長禄三年（一四五九）二月五日条では、東福寺稲荷山懺摩之会の供花を「挿す」と記し、また花材を器（瓶）へ入れること全てをも「挿す」と記していることから、必ずしもそのような区別があるとは言えないことがわかる。

一方、『蔭涼軒日録』において、禅僧による場合は「花」を「挿す」と記しながら、立阿弥や台阿弥、仲清の「花」を「立てる」と記している[80]ことは、将軍家の座敷飾りにおける「花」が「立てる花」と認識されていたことを物語っていよう。それとともに「花」が座敷の装飾に使われたことを記す『看聞日記』（後出・第4章）や、禁裏の連歌会の「花」について記した『山科家礼記』・『言国卿記』において「立てる」と使われていることは、座敷の装飾に使用される「花」が「立てる」ものという認識を人々に植えつけていたであろうと考えられる[81]。それゆえに「たて花」と呼ばれたのであろう。

このようななか、連歌・和歌において「挿す花」とのみ詠まれたのは、花（植物）を器（瓶）へ入れることを「挿す」と詠むことが、連歌・和歌の手法として守られたからであろう。他方、禅僧社会において「花」を「挿す」と記したのは、禅僧社会の慣習からといえよう。

それでは「花」・座敷飾り・連歌会はどのような関係にあったのであろうか。以下、『看聞日記』を中心にみていきたい[82]。

4　連歌会における「花」

①　連歌会と「たて花」

十五世紀初～中期に記された『看聞日記』を読むと、筆者・伏見宮貞成の多彩な文化受容が記される[83]なかで、連歌についての記事が多く見出される[84]。

連歌会は、家として行われる「月次連歌会」とうちうちに行われる「臨時連歌会」の大きく二つに分かれ、「月次連歌会」は連衆・例会の日・一献（小酒宴）についてなどの取り決めがあり行うもの[85]、

「臨時連歌会」は庚申待・月見・花見・雪見の折、そのほか余興としてや余暇の充足として特に取り決めなしに行うものであった。[86]

このうち「月次連歌会」の場合に、「天神名号」が掛けられたことや座敷の飾りつけについて記されていることから、座敷の飾りつけは主に「月次連歌会」の場合になされたと思われた。[87]

他方、同日記の七月七日条七夕の記事には毎年「花座敷」と呼ばれる伏見宮家の七夕の座敷の飾りつけが記されており、ここからは「花」が供花的役割から観賞の対象へと変化する様子がわかる。

また室町時代の花伝書『仙伝抄』には「連歌の花」についての一条がある。それを見てみると、

一　連歌の花は、発(ほつ)句を聞たらば其躰(てい)にたがはざるていに立べし。若き(聞)かずは松をしんに立、下草に当季のものを用ゆ。すがたいき(異曲)よくなるよろしからず。

（日本華道社　『仙伝抄』上）[88]

一　連歌会の花は、発句を聞いているときはその内容に外れない姿に立てるのがよい。もし発句を聞いていないならば松をしんに立て、下草にその季節のものを用いる。その姿がまがりくねったものになるのはよくない。（私訳）

これは『看聞日記』には使われていない「しん」・「下草」という、「たて花」の構成を示す言葉が使われていることから、同日記より後の十五世紀後期以降の記事と思われる。また連歌会には「たて花」が立てられるものであったことがわかる。発句は事前に決められた頭人（世話役）が出すことになっている場合が多く、[89]事前に詠む者が決まっており、従って連歌会が始まる前に発句が作られている場合もあり、発句を聞いて「花」を立てることもできたといえよう。

以下、『看聞日記』から、連歌会の「天神名号」に対する「供花」が、観賞の対象である連歌会の「たて花」へとどのように移っていったのかを見ていきたい。

②　月次連歌会と「供花」

伏見宮家において月次連歌会が始められたのは、応永二十五年（一四一八）のことである。以下、月次連歌会の座敷飾りの様子が詳しく記された応永二十六年（一四一九）六月十五日条を見てみる。

十五日。（中略）有月次連歌。頭人隆富也。会席聊刷之。西面四間与常御所相合障子撤之為八間。屏風二双立廻。天神名号西面奉懸。妙法院御筆。脇絵二幅梅。懸之。其前立机一脚。花瓶香炉等置之。左脇南。絵二幅寒山拾得。懸之。其前立卓置花瓶。（後略）

（枠は筆者の加筆）

この記事から月次連歌会の飾りつけが、「天神名号」を掛け、その前に立てられた（置かれた）机に香炉や花瓶などを置くものであったことがわかる。この場合の「瓶花」は「供花」と捉えられよう。

③ 花座敷

座敷飾りとは、立て回らせた屏風に唐絵を掛け、その前に立てた机や棚に唐物を飾るものであった。それに加え、伏見宮家では毎年七月七日の七夕に、花瓶を多数ならべ置き飾って七夕法楽の行事を行っている。『看聞日記』ではこのような座敷を「花座敷」[90]と記した。以下、「花座敷」の様子が詳しく記された応永二十五年（一四一八）七月七日条を見てみよう。

七日。（中略）抑七夕法楽草花召集。先会所常御所。聊飾之。屏風一双立廻。唐絵五幅懸之。其前棚一脚立之。層重々花瓶。色色置物有之。左右脇卓机等立並。花瓶敷瓶盆等置之。北間本尊達摩。懸之。其前卓一。氈一枚敷之。飾大概如此。花所進人々。

御自分一瓶。茶碗。三位一瓶。草花。瓶胡銅盆。重有朝臣一瓶。胡銅盆。長資朝臣一瓶。胡銅。即成院二瓶。胡銅香台二。退蔵庵一瓶。胡銅蓮華立。光台寺一瓶。胡銅盆。玄忠一瓶。胡銅盆。光意一瓶。胡銅盆。行光一瓶。胡銅盆。禅啓一瓶。胡銅香台。有善一瓶。唐金盆。宝泉二瓶。胡銅唐盆二。此外大光明寺。蔵光庵。法安寺。下野良有。花許進之。以上十五瓶有之。

（後略）

「花座敷」と月次連歌会の飾りつけの大きな違いは、「花座敷」には「天神名号」が掛けられておらず、花瓶の数が多いことであった。この座敷の飾りつけは「七夕法楽」のためのものであったことから、「花」は二星に供えるものであったと考えられよう。

この時期はまだ月次連歌会は「花座敷」では行われていない。しかし応永二十六年（一四一九）七夕の翌日の七月八日には、「花座敷」を使用して「花賞玩のため」の臨時連歌会が行われている。「花座敷」の「花」を見て楽しみながら連歌を巻くという趣向の連歌会であったことから、この「花」が供花的要素を含みながらも観賞の対象とみなされていたことがわかる。

また『看聞日記』の七夕（七月七～十日）の記事には、伏見宮の「花座敷」とともに、仙洞において「花合」が行われたことが記されている。[91]そこからは「花合」が「御楽」とともに催され、多くの「花」が集められたことはわかるが、その室礼等は記されていないため具体的にどのようであったかは知る事はできない。いずれにしろ七夕における「花」の在り様を、伏見宮では「花座敷」、仙洞に対しては「花合」とそれぞれ相容れることなく記している。

④ 月次連歌会と「花座敷」

伏見宮家の七月の月次連歌会が「花座敷」で行われるようになったのは、応永三十年（一四二三）の七夕からであった。同家の月次連歌会が応永三十二年（一四二五）から、一献準備の費用捻出ができないなどの理由で延期されるようになったことを考えると、「花座敷」の場で連歌会を行うのが得策であったといえよう。また連歌が盛んになり、貴族の伝統的な七夕の行事にこれを組み入れてもよいと考えられはじめたのであろう。

この年は翌日の七月八日に催され、「花座敷」に「天神名号」は掛けられなかったが、翌応永三十一年（一四二四）以後は七日の「七夕法楽」とともに行われ、「天神名号」が掛けられた。以下、この年の七月七日条を見てみる。

七日。（中略）草花面々進之。其人数。
前宰相一瓶。盆。重有朝臣一瓶。香台。長資朝臣一瓶。盆。
慶寿丸一瓶。盆。寿蔵主一瓶。梵祐一瓶。善基一瓶。法安
寺一瓶。光台寺一瓶。盆。松林庵一瓶。盆。行光一瓶。香
台。禅啓一瓶。盆。有善一瓶。盆。宝泉二瓶。堆紅盆二枚。
唐絵以下唐物種々。目六在別。
座敷屏風二双立之。天神名号三幅。又一幅。脇絵一対梅。布袋一幅。
脇二幅。花鳥。チカヰ棚色々置物共在之。其外卓立並花瓶数
十瓶置之。如形飾之。月次連歌。（後略）

（枠は筆者の加筆）

ここから、月次連歌会を行う場所は「花座敷」として「天神名号」が掛けられ、「供花」ではなく観賞のための「花」が多数置かれたことがわかる。他方和歌は、七夕法楽行事としては披講のみで和歌会は行われていない。また『仙伝抄』にも「和歌の花」という一条はない。

以後、飾られる唐絵や「花瓶」の数は増え、「花瓶」は常に五十瓶ほどが立てならべられ、さらに永享八年（一四三六）七月七日条の「花座敷」の記事には「僧良賢自伏見参。立花給御扇」と記されていて、伏見の良賢という僧侶が花を立てるために参上し、それに対し扇が与えられたことがわかるが、「しん」・「下草」という言葉は出てきていない。「たて花」という形にまでは発展していなかったのであろう。

他方、同日記には「花瓶香炉等」または「花瓶」を置いたとはあるが、どのような花（植物）が立てられていたかは記されていない。しかしそれは伏見宮貞成が花（植物）に無関心であったからではない。伏見庄にあった伏見宮の邸には梅・桜・梨のほか松が多くあり、東庭の池の周辺には薔薇が植えられ、草花を植えた花壇が別に築か

れ、北庭には当時夏の花材としてよく用いられた仙翁花（ナデシコ科・センノウ）も植えられていた。

のちに貞成が伏見の邸から移り住んだ一条東洞院の邸においても園池が造られ、梅・桜・松・躑躅・柳・桐・菊が植えられ花壇が築かれた。また籬を作り、種を蒔くこともしている。[92]

花（植物）に関心が持たれ、邸の庭では草花が栽培されており、庭の花を形よく花瓶に入れたいという思いや、部屋のなかに置いて身近に楽しみたいという思いが貞成やその周囲の人々には出て来たであろう。それとともに、「花座敷」の記事には花を立てた僧侶の名前が記されるようになり、唐物賞玩として花瓶を飾ることから花（植物）を立てること自体に視点が移り始め、「たて花」として形が整えられたと考えられよう。

後花園天皇の実父である伏見宮貞成の催す月次連歌会の「花」の主目的が供花から観賞へと変化したことは、他所で行われる連歌会の「花」の在り様に影響を与えたと思われる。『山科家礼記』からは、寛正四年（一四六三）八月二十五日条に初めて「しん」という言葉が見出され、文明八年（一四七六）以後、禁裏の月次連歌会に山科家当主・山科言国や同家雑掌・大沢久守らが「たて花」を立てた記事が見出される。[93]

さらに「花」を造形意識という点から考えるならば、東福寺の供花にせよ、七夕の二星や天神名号に対する供花にせよ、「手向ける」ものであったその行為を、「挿す」・「立てる」と表現するようになった時点で、その意識が芽生えたことが考えられよう。

おわりに

十五世紀中期において、東福寺禅僧の日記からは、禅僧たちの花（植物）や「花」に対する関心が大きなものであるとともに、「花」への関心が幅広い層に広がっていたことがわかるが、同じく東福寺禅僧であった正徹の和歌素材に、和歌の伝統にそぐわないことでありながら「瓶に挿す花」が詠まれたのは、一方でこのような「花」の営みがあったことと無縁ではなかろう。

さらに「瓶に挿す花」という素材が和歌へというよりも、正徹の和歌の弟子であった連歌師たちに受け継がれていった理由として、伏見宮貞成などの連歌会の在り様に見るように、連歌というものが元来、月見・花見ほか何かをしながら行うものであり、「花」を観賞しながら連歌を巻くということも当然の形であったが、和歌にはそのような形はみられず、その相違が一因として「瓶に挿す花」を素材とするかしないかに繋がったと考えられよう。

専順も正徹の弟子の一人であり、「瓶に挿す花」を詠んでいるが、専順が生きた時代の史料からは、専順が六角堂頂法寺の法師であったことは見出されるが、「池坊」の人であり「花」と関わりが深かったということは、確かであるとは必ずしも言えないといわざるを

得ない。管見の限りではあるが、「池坊」の「花」に関する記事の初出は文明十三年（一四八一）であり（第2章③）、専順の死後である。

史料に出てこないからといって、その事実がなかったとはいいきれない。しかし史料にないことを推測する場合、今日の視点や後の時代の史料からの類推ではなく、その人物が生きた時代の史料を確認する必要があろう。「池坊」は今日の「花」において大きな位置を占めるゆえに、「たて花」生成期においてもそのようであったと思いがちであるが、史料を読み直す限りにおいて必ずしもそうであるとは言いがたい。

このような中で、「挿す」・「立てる」の使用の相違は、禅僧・公家それぞれの社会における慣習から来るものといえ、連歌・和歌において「瓶に挿す花」と詠まれるものが、他方で様式として「たて花」と呼ばれたのは、将軍家、伏見宮家、禁裏の座敷飾りの「花」を扱う者たちが、慣習的に「立てる」という表現を使用する者であったからと思われる。

以上のことより「たて花」の生成期を担ったのは、現在の「花」の歴史において語られる「池坊」や「専順」といった存在であるというよりもむしろ、禅宗寺院や伏見宮家、禁裏、仙洞御所、将軍家、武家邸宅という場所や、僧侶をはじめとするそこに集う人々であったと考える。今後さらに「たて花」生成期の荷担者、建築・室礼空間、連歌との関係について考察を深めたい。

注

（1）『山科家礼記』において、「立花」と記されることもあるが、文明十二年三月九日条に「たてはな」と記されていることから、当該期の「花」を「たてはな」と呼んでいたことがわかる。また江戸初期以降の様式である「立花（りっか）」と区別する意味もあり、当該期の「花」を「たて花」としている。この「たて花」という様式のみ、「立花」・「生花」（江戸中・後期以降）・「盛花」（明治中期以降）など各様式が継続して他の様式と並行して存在することに対し、「立花」に取り込まれ今日存在しない。一般的に使用例が多い「花道」は、江戸期以降における各花型の総称と捉えられよう。

（2）研究史として「たて花」については、大井ミノブ氏（「花道史における展開期の問題―室町時代から江戸時代初期まで―」『日本文化史研究』肥後先生古稀記念論文刊行会編　弘文堂　昭和四十四年。『生活からみたいけばなの歴史』主婦の友社　昭和三十九年、四二～八九頁）、村井康彦氏（「生活文化の成立」『京都の歴史』3　京都市　昭和四十三年、四七二～四八〇頁・『花と茶の世界』三一書房　一九九〇年、六四～一〇〇、一〇八～一七一頁）、山根有三氏（『花道史研究』山根有三著作集七　中央公論美術出版　平成八年、十二～四二、八六～二九四頁）等の研究がある。

（3）正徹（一三八一～一四五九）。正徹の私家集『草根集』は正徹没後、門人の正広が編纂したもので、文明五年の一条兼良の序が巻

頭にある。

正徹については、稲田利徳『正徹の研究　中世歌人研究』笠間書院　昭和五十三年、『東福寺誌』白石虎月編　思文閣出版　昭和五十四年復刻版（昭和五年初版）、五三〇～六二五頁ほかを参考にした。

(4) 専順（一四一一～一四七六）。専順については木藤才蔵『連歌史論考』上　増補改訂版　明治書院　平成五年、四一三～四二〇頁。光田和伸『岩波講座　日本文学史』第六巻　岩波書店　一九九六年、一四八～一五二頁。斉藤義光「連歌七賢時代についての覚え書」『国語と国文学』昭和三十五年三月。斉藤義光「連歌師専順年譜」『大妻国文』十七号　一九八六年ほかを参考にした。

(5) 新日本古典文学大系6　岩波書店　一九九〇年、二八～二九頁。

(6) 日本古典文学大系19　岩波書店　昭和三十三年、四六、五八～五九頁。

(7) データの収録年代は、和歌が七〇〇年代～一五〇〇年代、連歌が一三〇〇年代～一六〇〇年代。

(8) 国際日本文化研究センター発行。この検索システムについては、勢田勝郭「連歌研究支援用例検索システム「Keiko II-R」」（『文学』九・十月号　岩波書店　二〇〇二年）に詳しい。

(9) 鈴木健一氏は、「歌道と花道―花瓶、花道、そして詩歌史へ―」（『和歌の伝統と享受　和歌文学論集10』編集委員会編　風間書房　平成八年）、二七三～二八〇頁において、中古・中世和歌の花瓶詠歌から「時間への感覚」や「時間意識」が看取されるとしている。また同稿においては詞書に「瓶に挿す花」を含む和歌も入れ、さらに数首の「瓶に挿す花」を詠んだ和歌が見出されている。

(10) 『金槐和歌集』新潮日本古典集成　新潮社　昭和五十六年、「金槐和歌集」三六三番。詞書は「梅の花を瓶にさせるを見てよめる」。口語訳は「小瓶に挿してある梅の花は、万年も過されるであろうわが君の髪飾りだったのだ」。挿す花をさらに挿頭に使っている。

(11) 新編『国歌大観』（CD-ROM版）二〇〇三年、第四巻「宝治百首」五八四番。

(12) 「新撰六帖題和歌」続々群書類従第十四、一一一頁。

(13) 『校註　国歌大系』第廿一巻「夫木和歌抄　上」国民図書株式会社　一九三〇年、五七七頁。

(14) 『草根集』Ⅳ（『私家集大成』第五巻中世Ⅲ　和歌史研究会編　明治書院　昭和四十九年）、(1)五四八四番、(2)二九〇三番。

(15) 『日本国語大辞典』第十二巻　小学館。

(16) 蜷川新右衛門親当。出家後、智蘊（?～一四四八）。連歌師、連歌七賢の一人。和歌を正徹に学び、その聞書きに『清厳茶話』がある。足利義教に仕えた。親当については、木藤才蔵『連歌史論考』上（前掲4）、三九二～三九九頁を参考にした。

(17) 行助（一四〇五～一四六九）。連歌師、連歌七賢の一人。山名氏の家臣筋で、延暦寺東塔の惣持坊に住居、権大僧都法印に至る。享徳～寛正期にかけて智蘊・心敬・専順らとしばしば同座した。

(18) 前掲（9）による。

(19) 太極は、東福寺桂昌門派の僧侶。出自は鞍智氏と推定される。文筆にすぐれたが、蔵主の位に止まった。今枝愛真「太極の思想と文学」『国語と国文学』昭和四十四年四月、玉村竹二「『碧山日録』記主考」『日本禅宗史論集　下之一』思文閣出版　一九七六年を参

考にした。

(20) 増補　続史料大成『碧山日録』を使用。

(21) 正徹の和歌に「氷室よりたねやうゑけん花の色に雪をいたせる庭の秋はぎ」『草根集』五八五〇番（前掲14）という種を素材にしているものがある。

(22) 『碧山日録』における植栽については、飛田範夫『日本庭園の植栽史』京都大学学術出版会　平成十四年、一七九、一八〇頁に詳しい。また花の栽培の記事は『碧山日録』だけに見られるものでなく、『看聞御記』永享三年七月四日条、『山科家礼記』文明十八年四月二日条、『お湯殿の上の日記』明応四年三月八日条ほかにも見られる。

(23) 『碧山日録』長禄三年四月二十八日条、寛正六年二月一日条ほか。

(24) 『碧山日録』長禄三年二月五日条ほか。

(25) 増補　続史料大成『蔭涼軒日録』を使用。

(26) 史料纂集『経覚私要鈔』を使用。

(27) 春公については、清水克行「ある室町幕府直臣の都市生活―『碧山日録』と「春公」についてのノート―」『東京大学史料編纂所研究紀要』第十二号　二〇〇二年（『室町社会の騒擾と秩序』吉川弘文館　二〇〇四年に所収）に詳しい。同稿によれば春公は、室町幕府直臣（外様衆）の鞍智高春。

(28) 宗砌・宗伊・心敬・行助・専順・智蘊・能阿の七人。

(29) 増補　続史料大成『大乗院寺社雑事記』を使用。

(30) 『梅庵古筆伝』続群書類従　第三十一輯下、三五二頁。

(31) 池坊編纂部編『華道家元　池坊由来記　全』華道家元華務課発行　大正十三年、一〇六～一一七頁。

(32) 石村雍子「室町時代連歌最盛期に活躍した蜷川智蘊と池坊専順についての覚え書き」『国語と国文学』昭和四十二年一月、その後同論文は、石村雍子『和歌連歌の研究』武蔵野書院　昭和五十年、第三章に入れられている。

(33) 福井久蔵『連歌の史的研究』有精堂出版　昭和四十四年、九六頁。また『俳諧大辞典』伊地知鉄男他編　明治書院　昭和三十二年、の「専順」の項目においても同様のことなどが記されている。

(34) 西堀一三他『挿花芸術』成美堂書店　昭和十年、西堀一三「室町時代の花道」『花道全集』第二巻　河原書店　昭和二十三年、大井ミノブ「花道成立の系譜」『日本歴史』二十三号　昭和二十五年四月号、同『生活からみたいけばなの歴史』（前掲2）ほか。

(35) 木藤才蔵『連歌史論考』上（前掲4）、四一四頁。また談話としてではあるが、島津忠夫氏は、専順が「花」を立てたという記述は一切見出せないと言い切る。さらに美術史家で花道家元の出身である山根有三氏は、専順について「実際に花に関係したとは思われない」と述べている（『花道史研究』中央公論美術出版　平成八年、一三二頁・初出は『大和文華』一四号　昭和二十九年）。

(36) 大井ミノブ『生活からみた　いけばなの歴史』（前掲2）、六三頁。

(37) 村井康彦『花と茶の世界』（前掲2）、一二六～一二七、一三五頁。

(38) 同句は後に『竹林抄』に再録されているが、「瓶に挿した桜の

花、それはまさしく蓬莱山をあしらった亀山の上に咲く山桜ともいえようか」と口語訳（新日本古典文学大系）される。

(39) 「千句連歌集」三『古典文庫』島津忠夫他編　昭和五十六年、五〇頁。

(40) 前掲（16）。

(41) 『七賢時代　連歌句集』金子金治郎・太田武夫編　角川書店　昭和五〇年。蜷川親当は、一四四八年に死去しているため、その句は一四四八年以前のものと考えられ、一四五二年の専順の句より早く詠まれているといえる。

(42) 正徹と親当の交流については、『正徹の研究　中世歌人研究』（前掲3）、一一八、一二一頁、『正徹物語』（『歌論歌学集成』第十一巻　三弥井書店　平成十三年）、二〇〇頁などからもわかる。また正徹は長禄二・三年、専順主催の和歌会にも出詠している（『草根集』第十四巻『私家集大成』（前掲14）八五〇、八五四頁）。

(43) 「千句連歌集」一『古典文庫』島津忠夫他編　昭和五十三年、二二二頁。

(44) 伊勢国司宰相中将教具。

(45) 続群書類従・補遺二『看聞御記』を使用。

(46) 史料纂集『山科家礼記』を使用。

(47) 『看聞御記』永享八年七月七日条ほか、『山科家礼記』寛正四年八月二十五日条ほか。

(48) 『古連歌千五百』（れ5・甲2）大阪天満宮文庫。

(49) 『古代中世芸術論』日本思想大系　岩波書店　一九七三年を使用、『金春古伝書集成』わんや書店　昭和四十四年を参考にした。金春禅鳳の生没年は一四五四～一五三二年。

(50) 『古代中世芸術論』（前掲49）、四八〇頁・4。

(51) 村井康彦『花と茶の世界』（前掲2）、一二七頁。

(52) 『実隆公記』巻二上　続群書類従完成会を使用。

(53) 「池坊」の記事は一四八〇年代以降見出されるようになり、大日本古記録『二水記』大永五年（一五二五）三月六日条以後、閏十一月十九日条等に、「池坊立華」の記事が見られるなどする。

(54) 『古代中世芸術論』（前掲49）、四八五頁。

(55) 勝秀公（中書令）については、『碧山日録』寛正元年二月二十七日条において、勝秀公が客に遣わすため、太極に梅を所望し、太極が数枝を贈っているほか、『碧山日録』長禄三年三月九日条において、春公・太極とともに、伊勢神宮詣でに出かけていることなどから、親しい間柄であったことがわかる。清水克行氏（前掲27）によれば勝秀公は京極勝秀。

(56) 前掲（27）。

(57) 細川護貞『中国瓶花といけばな』講談社　昭和五十八年、一五八～一五九頁。

(58) 『碧山日録』の専慶を池坊の専慶と位置づけた最初の文献は、肥後和男「生花の歴史」（『挿花芸術』成美堂書店　昭和十年）と思われる。その後、湯川制『華道史』至文堂　昭和二十二年、一二九～一三四頁で詳しくとりあげられている。

また現在、専慶流・桑原専慶流といういけばなの流派があるが、これらの流派の「専慶」は、江戸時代初期の富春軒仙渓（ふしゅんけんせんけい）を指している。

(59) 花道家元・池坊は流祖を小野妹子とし、彼が入道して名を専務

と改めたことから、以後の池坊宗匠はみな「専」の字を名前に使用するようになったとしている。また六角堂はもともとは特別の宗派に属さない無本寺であったが、明治に入り比叡山延暦寺を本山とする天台宗の寺院となり、さらに一九七一年、現四十五世家元が再び本来の姿にと比叡山から独立した（『花守人　歴史編』池坊専永監修　日本華道社　平成七年）。

(60) 六角堂頂法寺については、『平安京六角堂の発掘調査』（平安京調査本部・甲元眞之編　財団法人古代学協會　昭和五十二年）、五四～一〇九頁を参考にした。

(61) 東福寺住持第二百二十二世、松月軒に塔す。天文丙申生れ、元和元年七月七日寂。初代池坊専好とは、五十年来の友人であった。

(62) 『百瓶華序』続群書類従　第十九輯下、六一頁。

(63) 池坊専好は生没年不詳。安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍。その活動期が長いため、一般に初代・二代とわけられている。二代専好において「立花（りっか）」は大成したとされる。

(64) 寛正二年の飢饉に関しては、横井清「初期の町人生活」（『京都の歴史』3　京都市　昭和四十三年）、一〇七～一一四頁。西尾和美「室町中期京都における飢饉と民衆―応永二十八年及び寛正二年の飢饉を中心として」（『日本史研究』二七五号　一九八五年）を参考にした。

(65) 速水侑『観音信仰』（塙書房　昭和四十五年）、二八九頁。

(66) 『蔭涼軒日録』永享十年正月二十三日条以後、毎年七観音参詣が記されている。ほかに文正元年閏二月一日条に「六角堂東坊」という人物が見出されるが、「花」や「池坊」との関わりは記されていない。『経覚私要鈔』長禄四年（一四六〇）十月四日条には、経覚が京都七観音に参詣し、「達多年之本望」と記している。

(67) 戦国武人、播磨公。奈良東郊の古市城に住む。興福寺衆徒として名を馳せた古市澄胤の父。

(68) 『経覚私要鈔』宝徳二年三月十日条・宝徳四年四月十八日条。

(69) 『経覚私要鈔』宝徳三年四月十一日条・宝徳四年四月十九日条。

(70) 「花」の伝書。奥書によると、三条家の秘本を文安二年（一四四五）、富阿弥から七名を経て、天文五年（一五三六）「池房専慈」に至る人々に相伝とある。この約九十年の間に内容が整備されたものと思われる。幾多の箇条書きが寄せ集められたもので、序文も結論も書かれていない。

(71) 林家は江戸幕府の儒官として文教をつかさどった家。三代鳳岡以後代々大学頭を世襲。江戸時代の儒教界に大きな地位を占めた。

(72) 森谷尅久「池坊における家元制度とその組織」（『いけばな美術全集』八　集英社　昭和五十七年）、一八八頁。

(73) 「六角堂と池坊・池坊の系図」『池坊華道芸術図史』池坊学園短期大学華道文化研究所　昭和三十七年。

(74) 池坊専永「花道・池坊家の伝統」（『歴史と旅』秋田書店　昭和五十九年十月号）、『華道家元　池坊由来記　全・附「小野家池坊系図写」』前掲（31）を参考にした。

(75) 『蔭涼軒日録索引』蔭木英雄編　臨川書店　平成元年による。

(76) 『大乗院寺社雑事記総索引』上巻　人名篇（史料研究の会編　臨川書店　昭和六十三年）、二二四～二三〇頁による。

(77) 『いけばな美術全集』二（集英社　昭和五十七年）、八九、一六

八頁。

(78) 史料纂集『言国卿記』を使用。文明六年七月二十一日条ほか。

(79) 松岡心平氏は、「挿す」と「立つ」の使用について、「立つこと―中世的空間の特異性」(『日本の中世　7』中央公論新社　二〇〇二年)のなかで触れられている。

(80) 『蔭涼軒日録』文明十八年二月十日条・文明十九年四月十二日条・八月二日条ほか。仲清は『蔭涼軒日録索引』(前掲75)によると僧侶。

(81) 『満済准后日記』(続群書類従　補遺一)においても、永享元年七月二十日条仙洞七夕の「花」を「立てる」、同年七月一日条金剛輪院における水天供の桂柳を「挿す」としている。

(82) 第四章について、横井清『看聞御記　「王者」と「衆庶」のはざまにて』そしえて　一九七九年、島津忠夫「会所の文芸と芸能」『能と連歌』和泉書院　一九九〇年、『島津忠夫著作集』第一巻～第三巻　和泉書院　二〇〇三年ほかを参考にした。

(83) 和歌、和漢連句、茶、香、風呂、囲碁、将棋、蹴鞠、琵琶、猿楽、平曲、作庭、園芸など。

(84) 伏見宮の連歌については、「解題　(一)連歌」(『図書寮叢刊　看聞日記紙背文書・別記』宮内庁書陵部編　養徳社　昭和四〇年)、二〇～二九頁、位藤邦生「後崇光院と伏見宮連歌会」(『連歌と中世文芸』金子金治郎博士古稀記念論集編集委員会編　角川書店、同『伏見宮貞成親王の文学』清文堂出版　一九九一年に所収)ほかを参考にした。

(85) 伏見宮家で月次連歌会が行われるようになったのは貞成の代からで応永二十五年三月から、月次連歌会の「法様」(きまり)が定められたのは応永二十六年四月からであった。

(86) 『満済准后日記』においても、花見や来客、待ち時間などに連歌を行っている(永享二年三月十七日条ほか)。当該期の連歌会については、廣木一人「月次連歌会考―『看聞日記』の記事から―」(『青山語文』27　平成九年)、三角範子「足利義教月次連歌会について」(『九州史学』122号　一九九九年)、拙稿「室町時代の連歌会と『花』」(『れぎおん』45～47号　二〇〇四年)ほかがある。

(87) 廣木一人氏は、「連歌張行の建物・部屋」(『文学』九・十月号　岩波書店　二〇〇二年)において、連歌会の場を身分差意識という点から考察されている。

(88) 『仙伝抄』上・下　華道家元池坊総務所編集　日本華道社　昭和五十六年を使用した。

(89) 『看聞御記』応永二十六年四月一日条。室町殿(義教)月次連歌会においても同様である(『満済准后日記』永享二年二月十日条ほか)。

(90) 『看聞日記』において「花座敷」という言葉の初見は、応永二十六年七月八日条である。前年の二十五年七月八日条は「花座席」、同九日は「花飾等」と記されている。しかし「花座敷」の初見記事の前年七月七日条において、その様子が最も詳細に記されていることから、応永二十五年ころから、「花座敷」という意識が持たれるようになったと思われる。

(91) 仙洞花合は『看聞日記』応永二十七年七月八日条には七十七瓶、永享三年七月七日条には百七瓶立てられたとある。

(92) 『看聞日記』における植栽については、『日本庭園の植栽史』(前掲22)、一六八～一七三頁に詳しい。

(93) 拙稿「中世後期文化の一様相—山科家の日記にみる『花』—」(『女性歴史文化研究所紀要』第六号　京都橘女子大学女性歴史文化研究所　一九九七年)、二一～二八頁。